あなたの街のドクターがアドバイス

乳がん検診で高濃度乳腺といわれたら

病気ではありませんが、乳がんの発症リスクが高まるといわれています

乳がん検診は乳がんの早期発見には有用であり、定期的に検診をうけることが大切なのはいうまでもありません。最近、乳がん検診において高濃度乳房という用語が使われることがあります。これはどのようなものなのでしょうか。

乳房は、乳腺実質といって乳汁をつくる小葉や乳汁を運ぶ乳管からなる部分と周囲の脂肪よりなっています。この乳腺実質が多い状態を高濃度乳房といいます。40歳代女性に多く、全体で10％程度といわれています。なぜ、これが最近話題になっているのでしょうか。マンモグラフィー検診ではこの乳腺実質は白く、脂肪は黒くうつり、腫瘍性病変（いわゆるしこり）も白くうつるため、そのコントラストで病変の有無を判断します。ところがこの高濃度乳腺というのは乳腺実質が多いため、乳腺と病変のコントラストがつきづらく、がんが発見されにくいとされます。

高濃度乳房ではマンモグラフィー検診の精度が下がるため、超音波検査を追加することもあります。ただ、乳がん検診の現場でこの高濃度乳房を受診者に告知し、超音波検査を追加すべきかが議論になっています。これは一口に乳がん検診といっても対策型検診（市町村などで行う検診）か任意検診（企業や個人が自費で行う）かによっても扱いが違い、まだ方向性が定まっていないのが現状です。また、高濃度乳房は、乳腺実質の量が多いため、乳がんの発症リスクが高まると報告されていますが、これ自体が将来的に病気になるというわけではないのです。

大切なのは、高濃度乳房といわれても、異常な状態（病気）ではないということを正しく理解することです。また、乳がん検診を受診すればがんの心配はない、ということではなく、検診後であっても定期的にセルフチェックを行い、乳房のしこりなど、自覚症状がある場合は速やかに医療機関を受診してください。

今回のドクターは

大通り乳腺・甲状腺クリニック
院長
亀嶋 秀和 先生

1992年札幌医科大学卒業。同大第一外科、がん研有明病院、滝川市立病院、東札幌病院などの勤務を経て2017年4月開院。日本乳癌学会認定乳腺専門医、日本外科学会認定外科専門医